

徒然草の「語る」の用法から

村 井 董 直

岡山理科大学教養部

(昭和61年9月30日 受理)

1. はじめに
2. 万葉・八代集の「語る」
3. 竹取物語の「いふ」と更級日記の「語る」
4. 徒然草の「語る」
5. 兼好家集の「語る」
6. おわりに

1. はじめに

私はさきに拙著「凡庸」において徒然草について論じ、その序段の「あやしうこそものぐるほしけれ」をめぐって私の考えを述べてきた。それは「つれづれなるままに、一日中、硯に向かって心に浮んでくるとりとめもないことを、あれこれと書きつけていくと」なぜ、気も狂わんばかりの気持となるのだろうか、をめぐっての試論であった。そこでは、私は道元の正法眼蔵仏性巻にある「仏言 一切衆生 悉有仏性 如来常住 無有変易」の一節をとらえ、その読み方について巷間読まれているような「仏言ハク 一切ノ衆生ハ 悉ク仏性アリ 如来ハ常住ニシテ 変易アルコトナシ」ではなくて、「仏言ハク 一切ノ衆生ハ 悉有仏性ナリ 如来ハ常住デアリ 無デアリ有デアリ 変易デアル」である、いや、であらねばならぬと考え、このような文体と徒然草序段の文体との関連性を基本において、次のように結論づけたのである。すなわち、拙著から引用すれば、「つれづれならんとする強い願いが一方にあり、だからといって現実はやしなごとの連続であることもたしかな事実、書きつけた結果がものぐるおしき状態ではなくて、はじめから兼好にとり、ものぐるおしき世という捉え方をしていると考えるべきではないか。極端な書き方をすれば、この徒然草は人生にかかわる問題について書いてあるのではなく、人生そのものについての問題を提起しているのである。惜しいことに道元ほどの透徹した人間になりきることができず、理想の彼岸へのあこがれをもちつつも徹しきれない——これを兼好の甘さ、若さ

とでもいえようか——自分を表したのが序段ではなかろうか」と。爾来、多くの方からご叱正をいただき今日に及んでいる。だが、私の原点はいまだに変わろうとしない。しないながらも、このことを別の角度から考えてみようと思ひ、筆をとったのが本稿である。別の角度というのは、徒然草本文中から「語る」の語を抜き出し、そこから一考したということである。以下、古典の引用は岩波古典文学大系本、角川版新編国歌大観によった。

2. 万葉・八代集の「語る」

三省堂の時代別国語大辞典では「かたる」を物事を話し聞かすとし、「イフが一般的なのに対して、聞き手を意識して一まとまりの内容を話しかける場合によく使われ、ノルやツグと異なる。」とある。そして同類の語として、(かたらひぐさ・かたらふ・かたり・かたりごと・かたりさく・かたりつぐ)を挙げて、いずれもその出所を説明している。岩波の日葡辞書にも「かたる」があり、関連するものとして(語らふ・語らひ勢・語らひ寄る・語らひゆく・語り合ふ・語り慰め、)を挙げて、親密にするという意味に解している。また、岩波の広辞苑では、「心に思っていることを言葉で順序立てて相手に伝える。物語る。一部始終をすっかり話す。節をつけてすっかり話す。小児がかたことで物を言う。」とある。朗続と小児の件はさておき、それ以外は時間をかけて伝達するという意味が濃いようである。事実の伝達、報告という要素が主であるように思われる。以下このことについて論を進めていくが、私の立場としては日葡辞書が最も近いのではないかと思われる。

「語る」の語は、単独に用いられている場合もあれば複合動詞として「語り出づ」「語り興ず」「語りつぐ」「語り伝ふ」のような形で用いられている場合もあり、あるいは熟語として「問はず語り」「昔語り」「物語り」のような形で用いられている場合もある。そこで、いったい「語る」とはどのような性格のものであるか、その消長はどうなっているかを簡単にふりかえることにする。

にはどり おきなが
鳩鳥の息長川は絶えぬとも君に語らむ言尽きめやも(4458)

万葉集からの短歌である。息長川は現在の滋賀県坂田郡近江町を流れる川であるが、息の長いといわれる息長川が、たとえ絶えてしまうことがあったとしても、私が君に語りたことばが尽きることがあろうか、いや絶対にありはしない、という意であろう。ここの「語る」に単なる伝達や報告の意味は全くなく、自分に内在する深い恋慕の情を訴え続ける意味をもっていると見るべきだろう。同じく万葉集に

わが背子が来むと語りし夜は過ぎぬしゑやさらさらしこり来めやも(2870)

一首の意味としては、わが背子が来ようと語った夜は過ぎてしまった。あゝ今更、まちがっても訪ねて見えることはないでしょうねえ、ということになろう。ここの「しゑや」が「語りし」の意味を明確に示しているように思われる。これは、決意、断念、放任を表

わす間投詞といわれる。こうした決意の語を使わねば気がおさまらないのは何故か、それこそ「語りし夜」の「語る」の内容を示しているといえることができよう。単に「いふ」のではなく、愛情のすべてを感動をこめて話したのではなかったろうか。「語る」はそうした意味をもっていると考えべきだろう。同じく万葉集に

梅の花夢に語らく風流^{みや}びたる花と我思ふ酒に浮べこそ (852)

ここでは「語らく」という形で出ている。いうまでもなく四段動詞の未然形にその語を体言化する接尾語「く」がついて「語ることには」という意味をもっている。それ故、梅の花が夢で語ることには、私は風雅な花だということだ、だからどうか酒杯に浮べてほしい、という意になる。「夢で語る」という表現は、平安時代の物語にも和歌にもしばしば出てくる表現である。ここでは風雅という響きのよい花であることの夢を見たのであろう。決して忌み嫌う内容ではない。また、

万代に語り継げとしこの嶽^{ひれ}に領巾振りけらし松浦佐用姫 (873)

がある。一首の意は、万代までも語り継げとて、この山の上で領巾を振ったらしい、松浦佐用姫は、ということになる。ここでは「語る」単独ではなく、複合された動詞の例としてあげたのであるが、山上での領巾振りはこの短歌の前後に多く歌われており、松浦佐用姫が別れに際し、肝を断ち、魂を消すほどの深い悲しみに沈んで領巾を振ったという感動的場面を「語り継」ごうではないかといっているのである。決して「言ひ継ぐ」ではない。今、万葉集の例を四例ほどあげたが、それらに共通することは、「語る」は「言ふ」ではなく、「歌ふ」「宣る」でもない独自性をもった語といえることができよう。勿論、古事記にも頻出する語句として「ことの加多理^{かたりこと}其登も此をば」をあげることもできるし、古語拾遺にも「蓋聞 上古之世 未有文字 貴賤老少 口々相伝 前言往行 存而不忘」の時代を思えば、感動的、持続的な意が強く、伝達という意は稀薄だったのではないかとと思われる。その後、古今集以下の勅撰集を迎えるが、「語る」は万葉集ほどには使用されていない。主なものをあげると古今集では恋歌に

しのぶればくるしきものを人知れず思ふてふことたれに語らん (519)

「人知れず思つて」いることを人に吐き出すとき、

後撰集では雑歌に

見えもせぬ深き心を語りては人にかちぬと思ふものかは (1279)

「見えもせぬ深き心」を人に話すとき、

後拾遺集では春歌に

折らでただかたりに語れ山桜風に散るだに惜しきにほひを (85)

「惜しきにほひ」を語る時、

金葉集では春歌に (94) として

春のゆく道にきむかへ子規語らふ声にたちやとまると

愛好するほととぎすのさえずるとき、

などをあげることができる。万葉集のそれと違ってやゝ内省的な沈潜した心情を話すときに「語る」が使われているようであるが、これとて感動的、持続的な心情表現の語であるとみてさしつかえない。しかし、さきにもふれたように使用頻度からすれば、万葉集よりはるかに少なくなっている。日記・随筆・物語等の出現と表裏の関係にあるのだろうか。それを新古今集にとってみると、

夜もすがら昔のことをみつるかな語るやうつつありしよや夢（824）

これは、一条院がおなくなりになられて、程へて作者がありし日のことども夢にみたのを詠んだものだが、夢の中で語ったことが現^{うつ}なのであろうか、院の生きていられたことの方が夢だったのであろうかと、懐しさと悲しみの中で耐え忍ぶ心境を歌ったものであろう。

また、

あづまぢのよはのながめを語らなん都の山にかかる月かげ（942）

は、作者が東国への旅に出て夜半の眺めながら、わびしい心でいることをどうか都の人に語ってもらいたい、というのである。東国への旅、都を遠く離れての都への郷愁、その心を都の人に知らせるのではなく、人に頼んでこの気持を伝えてほしい、というのである。こうした場合に「語る」が使用されている。八代集に共通する使い方といってよいだろう。

3. 竹取物語の「いふ」と更級日記の「語る」

さて、こうした和歌に対して説話・日記・随筆等ではどうなっているか、これはあまりにも多いので一二の例を挙げるにとどめたい。まずは竹取物語をとりあげる。

八月十五日ばかりの月に出で居て かぐや姫いといたく泣き給ふ 人目も今はつつみ
給はず泣き給ふ これを見て 親どもも「なに事ぞ」と問ひさわぐ かぐや姫泣く泣く
言ふ「さきざきも申さんと思ひしかどもかならず心惑ひし給はん物ぞと思ひて いまま
で過ごし侍りつるなり さのみやはとて うち出で侍りぬるぞ おのが身はこの国の人
にもあらず 月の都の人なり それを昔の契りありけるによりなん この世界にはまう
で来りける いまは帰るべきになりければ この月の十五日に かのもとの国より
迎へに人々まうで来んず さらずまかりぬべければ 思しなげかんが悲しき事を この
春より思ひなげき侍るなり」と言ひて いみじく泣くを 翁「こはなでふ事のたまふぞ
竹の中より見つけきこえたりしかど 菜種の大きさはせしを わが丈たちならぶまで
養ひたてまつりたる我子を なに人か迎へきこえん まさに許さんや」と言ひて「われ

こそ死なぬ」とて泣きののしる事いと耐へがたげなり
 がある。圏点部分は、万葉集の「語る」から考えてたしかに「語る」にふさわしい場面であって「と語りて」とあるのが当然ではなかろうか。「…まさに許さんやと言ひて」の個所と同じに扱ってよいものだろうか。だが原文はそうになっていない。それどころか、竹取物語には「語る」の語を見出だすことはできない。また、最終の「ふじの山（むすび）」の部分を見ると、

逢ふことも涙にうかぶ我身には死なぬくすりも何にかはせむ

(逢ふこともないので その悲しさに茫然とあふれる涙にひたっている私の身にとつては 死なぬ薬も何の役にたとうの意 筆者注)

かの奉る不死の薬に 又壺具して 御使に賜はず 勅使には つきのいはかさという人を召して 駿河の国にあなる山の頂にもてつくべきよし仰せ給ふ 嶺にてすべきやう教へさせ給ふ 御文 不死の薬の壺ならべて 火をつけて燃やすべきよし仰せ給ふ そのよしうけたまはりて つはものどもあまた具して山へ登りけるよりなん その山をふじの山とは名づけける その煙いまだ雲の中へたち上るとぞ言ひ[・]伝[・]へ[・]た[・]る

とある。圏点部分に注目したい。これは遠い昔の話を聞かせているところである。なぜ、「語り伝へたる」となっていないのだろうか。これを考える前にもう一つ例を示しておこう。それは更級日記である。この日記の著者菅原孝標の女が上総の国から上京の途中のことである。一行が武蔵国へ入った時、そこで聞いた竹芝寺のことについての記述である。

……竹芝という寺あり 遥かに は、さうなどいふ所の廊の跡の礎などあり いかなる所ぞと問へば

に対して土地に住む者が寺の由来を語る。すなわち、

火たき屋の火たく衛士が 庭の掃除をしながらひとり言を言っているのを 帝の御娘が簾のきわでこれを聞き 近くに衛士を呼び寄せ ひとり言をもう一度言わせて 私をそこへ連れていけといわれる そこで衛士は御娘を背に負い七日七夜かかって武蔵国につく 勿論 帝からの追手が迫る 三か月かかって追手は御娘を見出だすが 御娘はこうなるのが私の宿世といって帰京をこぼむ それを聞いた帝は致し方なく宣旨を下されて その国を衛士と御娘に授け家を内裏の如く作って住ませた。星霜幾歲月 人も死に邸も荒れ果てたので ここを寺にしたのが この竹芝寺である

ということを土地に住む者が説明する。その結びを

「……女はるるなり」と語[・]る とある。これは間接的な経験の場合であるが、直接経験はどうなっているのか。同じく更級日記を引用する。

富士河といふは 富士の山より落ちたる水なり その国の人の出でて語[・]るやう「……」と語[・]る

の「……」の個所を口語にいかえると、

ある暑い日 川面に休んでいると川上から反故が流れてきた とりあげてみると どうやら来年の国守の任命書のようなものであった 驚きあきれたものの それを乾してしまっていたところ 一年後ほんものの除目が発令されたが 拾った反故に書かれたものと全く同じことだった どうやらこの上流の山に神々が集って相談なさったらしい それにしても珍しいことでした

という内容である。この文章の前後を「語る」で括っている。ここに私は竹取物語の二例と更級日記の二例とをあげた。そして同じ内容のことを書いてあるにも拘らず竹取物語においては「言ふ」を使い、更級日記では「語る」を使っている。古事記・万葉集などの使用法から考えると、更級日記は当然の使い方であって、竹取物語が不自然な使い方といえよう。ましてや、今昔物語のように「となむ語り伝へたとや」の形式にほぼ統一されるようになったことを思えば 尚更と思われる。もっとも竹取物語成立のころは、和歌が第一級の文芸であり、一つ一つの和歌が、ほとんど作者とともに伝えられてきたのに対し、竹取物語はその成立事情も定かでなく、おそらく人々の関心の圏外にあったことを思えば、物語というより説話とした方が適切なのではなかろうか。それに比べると更級日記の方は、作者が旅の途中、この伝説を聞いたり、直接経験した人より聞いたりした、その内容の珍しさ、驚きに興味をもったがために「語る」の語を使ったとすれば、それがそのまま「語る」という語の内容を示しているといえよう。

4. 徒然草の「語る」

以上のことを念頭において、徒然草では「語る」はどのように使用されているかについて述べることにする。

徒然草に出てくる「語る」は他の作品と同じように「語る」単独で出てくる場合もあれば、「語らふ」という形で出てくる場合もあり、又、他の動詞に接続して「語り興ず」のような複合動詞として出てくる場合もあり、すでに体言化されて、「御物語」のような形で出てくる場合もある。数の上でいえば、単独で使用されているのが16例、「語らふ」の形が3例、複合動詞の形が11例、「物語り」という形が8例、計38例である。以下、具体例をあげることにする。

(1) 久しくへだたりて逢ひたる人の 我が方にありつる事 数々に残りなく語りつゞくるこそ あいなけれ 隔てなく慣れぬる人も 程へて見るは 恥づかしからぬかは つぎさまの人は あからさまに立ち出でて今日ありつる事とて 息もつぎあへず語り興ずるぞかし よき人の物語りするは 人あまたあれど 一人に向きていふを おのづから人も聞くにこそあれ よからぬ人は 誰ともなく あまたの中うち出でて 見ること

のやうに 語りなせば 皆同じく笑ひののしる いとらうがはし (56段)

における「語る」についてみよう。自分の方にあった事を何もかも残りなく話して聞かせることを「語り続ける」とし、教養や品位において一段と劣った人は、ちょっと外出しただけでも、あったことを息もつかせずしゃべりたて得意顔になっている、そういう時に「語り興ずる」とし、無教養で趣味を解せない人は出しゃばってこしらえ話をするを「語りなす」としている。この内容からすれば、自分だけのことを話し続けるからこそ、兼好は「あいなし」とい、「笑ひののしる」といっている。ここでは、興味をもつとか、感動的とかは全く感じられない。

(2)人の語り出でたる歌物語の 歌のわろきこそ本意なけれ 少しその道知らん人は いみじと思ひては語らじ すべて いとも知らぬ道の物語りしたる かたはらいたく聞きにくし (57段)

聞き手にとって「本意なし」と感ずる歌物語を長々としゃべり続けることの不快さを「語り出づ」を使って書いている。又、「語らじ」の場合は興味をもつてはしゃべらないというのであるから、「語る」と興味とは密接な関係にあることを示していよう。従って、「語り出づ」が悪い意に、「語らじ」がよい意に使われている。

(3)世に語り伝ふる事 まことはあいなきにや おほくは皆虚事なり あるにも過ぎて人はものを言ひなすに まして 年月過ぎ 境も隔りぬれば 言ひたきままに語りなして筆にも書きとどめぬれば やがて定まりぬ……かつあらはるるをもかへり見ず口にまかせて言ひ散らすは やがて浮きたることと聞ゆ また 我も誠しからずは思ひながら 人の言ひしままに 鼻のほどおごめきて言ふは その人の虚言にはあらず げにげにしく所々うちおぼめき よく知らぬよしして さりながら つまづま合はせて語る虚言は 恐ろしきことなり (73段)

この文には3箇所「語る」が使われている。「語る」ときの表情、結果の評価などを「あいなし」「言ひたきままに」「恐ろし」と言っていることをみると、話し手が感動をこめて聞き手の心を揺り動かすものとは とても考えられない。

(4)世中に その比人のもてあつかひぐさに言ひあへる事 いろふべきにはあらぬ人のよく案内知りて 人にも語り聞かせ 問ひ聞きたるこそうけられね (77段)

噂の種になっていることを かれこれ口を出すべきでない人が 事情を知って人に話して聞かせたり ほじって聞いたりしているのは どうも納得できないというのである。この「語り聞かせ」の内容は噂の始終だろうし、ことのあらましと受けとられる。事情をよくつかんで話すものの「うけられず」と否定的な評価をくだしていることとなる。

(5)世の人あひ会ふ時 暫くも黙止する事なし 必ず言葉あり その事を聞くに 多くは無益の談なり 世間の浮説 人の是非 自他のために失おほく 得少し これを語る時

互ひの心に無益の事なりといふことを知らず（164段）

「語る」は「談」とおきかえることもできよう。自分であれ、他人であれ、世間の浮説人の是非を言い合うことを「語る」で表現し、それを「無益の事」ときめつけている。

以上、徒然草における「語る」について類似した一つの使用法をあげてきた。これに関する限り、万葉集以来の使用法と大きく違っていることもわかる。むしろ、「話す」「言ふ」に近いと言えるし、結果的に悪感情をおこさせるような時に使っているとみてさしつかえない。

これに対して、平安時代までに使用されてきた意味とよく似た使い方をしているものをあげてみよう。

(1)後徳大寺の寝殿に鶯みさせじとて縄をはられたりけるを 西行が見て「鶯のみたらんは 何かは苦しかるべき この殿の御心 さばかりにこそ」とて そののちは参らざりけると聞き侍るに 綾小路宮のおはします小坂殿の棟に いつぞや縄をひかれたりしかば かの例思ひ出でられ侍りしに 誠や「鳥の群れゐて池の蛙をとりければ 御覧じかなしませ給ひてなん」と人の語りしこそ さてはいみじくこそと覚えしか（10段）

有名な一段であるが、「さてはいみじくこそと覚えしか」とあるように、りっぱな事だと感じさせる言いざまを「語る」としている。

(2)互ひに言はんほどの事をば「げに」と聞くかひあるものから いささか違ふ所もあらん人こそ「我はさやは思ふ」など争ひ憎み「さるからさぞ」ともうち語らはば つれづれ慰まめと思へど げには少しかこつたも 我と等しからざらん人は 大方のよしなしごとと言はんほどこそあらめ まめやか^{もろこし}の心の友には はるかにへだたる所のありぬべきぞ わびしきや（12段）

ここでは「語る」が一つ、「言ふ」が二つ使われている。「語る」の場合は「つれづれ慰まめ」とあり、「言ふ」の場合は「よしなしごと」を言ふのであり、又、結果として争ひ憎むことになる。してみると「語る」はお互いに意見を述べ合って一つの共通点に到達するよう努力する過程の中に楽しみが湧く、そういう話し合いを「語る」は意味している。この段の冒頭に「しめやかに物語りして」とあるが、「しめやかに」が一層その意味を示していると思われる。

(3)唐土に許由といひつる人は さらに身にしたがへる貯へもなく^{もろこし}て 水をも手して捧げて飲みけるを見て なりひさこといふ物を人の得させたりければ ある時木の枝にかけたりけるが 風に吹かれて鳴りけるを かしかましとて捨てつ また手に掬びてぞ水も飲みける いかばかり心のうち涼しかりけん 孫晨は冬月に衾^{ふすま}なくて藁一つかねありけるを 夕にはこれにふし 朝にはをさめけり 唐土の人は これをいみじと思へばこそ記しとどめて世にも伝へけめ これらの人は語りも伝ふべからず（18段）

ここでは最後に「語る」が使われている。唐土の許由が財を持たず、奢りを退けて暮らす生活態度を紹介し、唐土の人はこれをりっぱな態度だとして書き残したが、わが国の人は語ることさえしないというのである。りっぱな生活態度に深い関心をもってしゃべり伝えもしないというのである。

(4)飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば 時移り 事さり 楽しむ 悲しびゆきかひて
花やかなりしあたりも人住まぬ野らとなり 変らぬ住家は人あらたまりぬ 桃李もの言は
ねば 誰とともにか昔を語らむ (25段)

和漢朗詠集、菅原文時の「桃李もの言はず 春幾たびか暮れし 煙霞跡なし 昔誰か栖みし」を受けているが、ここではみごとに「言ふ」と「語る」を対照的に使用していることがわかる。そしてそれぞれの語の内容を示しているといえよう。「言ふ」は言語行動の事実について、「語る」は感情を含めてのものといえる。兼好が目で見、耳で聞いた風景を恋い慕う心情を汲みとることができる。その風景を誰とともに語ろうかというのであるから、深い感動をこめて懐かしむ心情を「語る」で表現していると考えられる。

(5)園の別当入道は さうなき庖丁者なり ある人のもとにて いみじき鯉を出だしたり
ければ 皆人 別当入道の庖丁を見ばやと思へども たやすくうち出でんもいかがとた
めらひけるを 別当入道さる人にて「この程百日の鯉をきり侍るを 今日欠き侍るべき
にあらず 枉^まげて申し請けん」とてきられける いみじくつきづきしく 興ありて人ど
も思へりけると 或人 北山太政入道殿に語り申されたりければ「かやうの事 己はよ
にうるさく覚ゆるなり 切りぬべき人なくは 給べ 切らん と言ひたらんは なほ
よかりなん 何条 百日の鯛を切らんぞ」とのたまひたりし をかしく覚えしと人の語
り給ひける いとをかし (231段)

「語り申され」の「語り」は或人が北山太政入道殿に別当入道の鯉を料理するにいたった経緯にひどく感心して語ったのであり、「語り給ひ」の「語り」は北山太政入道殿が言った事を人から聞いた兼好が「をかし」と感じた、その人の話を「語り」で表現している。いずれも、すばらしい出来事を「語る」のである。

(6)丹波に出雲といふ所あり 大社をうつして めでたくつくれり しだのなにがしとか
や知る所なれば 秋の比 聖海上人 その外も 人あまた誘ひて「いざ給へ 出雲をが
みに 搔餅^{かいもちひ}めさせん」とて具しもていきたるに おのおの拝みて ゆゆしく信おこした
り 御前なる獅子 狛犬 背きて後さまに立ちたりければ 上人いみじく感じて「あな
めでたや この獅子のたちやう いとめづらし ふかき故あらん」と涙ぐみて「いかに
殿原 殊勝のことはご覧じとがめずや 無下なり」といへば おのおのあやしみて「誠
に他にことなりけり 都のつとに語らん」などいふ (236段)

ここは、獅子と狛犬が背中を向け合って後向きに立っている珍しさを、出雲大社の分身で

あるこの社の尊さとを重ねて「いみじく」感じて都への土産話としようという個所に「語る」が使われている。この段は更に文章が続く。すなわちあまりの珍しさに上人は神官にそのわけをたずねる。神官はいたずらこどもたちの仕業ですよと答えて元の通りに直してしまう。そこに「上人の感涙いたづらになりけり」とあるが、感涙まで流させたほど、上人一行は感じ入ったのである。

(7)最明寺入道 鶴岡の社参の次に 足利左馬入道の許へ まづ使を遣はして 立ち入られたりけるに あるじまうけられたりける様 一献にうちあはび 二献にえび 三献にかいもちひにてやみぬ その座には亭主夫婦 降弁僧正 あるじ方の人にて座せられけり さて「年毎に給はる足利の染物 心もとなく候」と申されければ「用意し候」とて色々の染物三十 前にて女房どもに小袖に調ぜさせて 後につかはされけり その時みたる人の ちかくまで侍りしが語り侍りしなり (216段)

これは最明寺入道（北条時頼）が鶴岡八幡宮へ参詣の途次、足利左馬入道（足利泰時の娘婿、義氏）の所に立ち寄り、三献の饗応を受けた時、今の足利市の名産の染物を所望したところ、「用意致しております。」と云って後日下着を贈ったという話である。それを受けて、ある時、ある所の面白い興味ある事実を人に話したところを「語る」の語を使っているところに作者兼好も珍しい話として受けとったことを示しているといえよう。

(8)八つになりし年 父に問ひて云はく「仏は如何なるものにか候ふらん」といふ 父が云はく「仏には人のなりたるなり」と また問ふ「人は何として仏には成り候ふやらん」と 父また「仏のをしへによりてなるなり」とこたふ またいふ「教へ候ひける仏をばなにがをしへ候ひける」と また答ふ「それもまた さきの仏のをしへによりて成り給ふなり」と またとふ「その教へはじめ候ひける第一の仏は 如何なる仏にか候ひける」といふ時 父「空よりやふりけん 土よりやわきけん」といひて笑ふ「問ひつめられてえ答へずなり侍りつ」と 諸人に語りて興じき (243段)

これは徒然草最終段の有名な話である。兼好が8歳の時、父の卜部兼顕に、仏について次々と問いを發して、とうとう父が答に窮して、空からふってきたのであろうか、地から湧いてきたのであろうかと、子の追求に一方では驚き、一方では子の才覚に感心して周囲の人々に話したということに「語る」を使っている。ここでも「いふ」と「語る」が明確に区別されている。

以上、徒然草における「語る」についてその用例を調査した。その結果、次のようなことが考えられるのではないか。すなわち、前の(1)から(5)までは、結果的に好ましくない感情を聞き手にひきおこさせるにも拘らず、その話がかかなり長時間にわたって話される場合でも「語る」が使われているということが一つ。後の(1)から(8)までは、前の(1)から(5)までとは正反対に万葉集以来の例で示したように、最も好ましい事件や事実を感動的に人に話

すときに「語る」が使われているということが一つ。以上二つの使い方が徒然草では考えられるようである。そう考えると「語る」の独自性というものが幾分薄らいでいったのであろうか。

5. 兼好家集の「語る」

兼好には徒然草のほかに家集を遺している。新編国歌大観によると「成立は貞和元年(1345)4月から同2年12月の間、風雅集撰集のためにした自筆草稿本と考えられる」とする富倉徳次郎氏の説を引用している。歌数は284首と連歌2句から成っており、それには他人作の歌15首と連歌1句を含んでいるので、兼好の作としては歌269首と連歌1句ということになる。正式の呼称は定かでないが、江戸期寛永の頃、前田家に蔵されていた原本を中院通村が借用し、それを返却するにあたって「感悦に堪えず」して書き加えた一文があり、その文中に「兼好法師自撰家集」とあるところから今日ではそれを呼称としている。本稿では単に家集と呼ぶこととする。

ところで、この家集は他のものとはかなりの違いがある。まず、冒頭に「家集事」として

歌員事……不可定之 多少随意 長歌連歌等相交 贈答勿論也 又非贈答他人歌 隨便
多書載之

部立事……全不可有之 雖有分部人 不然 尤甘心者也

巻頭事……無部立之上者 可任意 恋雜等又秋冬勿論也

哀傷歌事…自巻頭第十五番書之 忠岑集如此

詞事……如日記物語等長書統 又歌合判詞是非故実等以次書 其才学常事也

とあり、それを統べて最後に「以上得此意可書之」で結んでいる。要するに、従来の形式にこだわらず、歌数も定めないで随意とし、部立は全くたてないし、詞書は日記・物語のように長く書いていくというのである。例えば詞書についてみる。兼好と同時代で、しかも兼好とともに当時和歌の四天王といわれた頼阿の草庵集をみても、勅撰集と同じように部立による構成になっており、続草庵集も同じである。またこれも四天王の一人である慶運の家集も巻を立てての構成ではないが、総数296首を春・夏・秋・冬・恋・雑の順にまとめられている。又、兼好の詞書は旧習に従わず、それは冒頭の1首を見ただけでもわかる。頼阿は「春たつところを」、慶運は「立春」、これに対して兼好は、「春のころより来むといふ人の 秋になるまで訪はぬに」といった調子である。そうした破格の自撰歌集である。これから「語る」について引き出してみることにする。因みに、頼阿や慶運の家集からはこの語を見出すことはできない。

冬の夜 あれたる所のすのこにしりかけてこだかき松の木の間より くまなくもりた

る月を見て あか月まで物語りし侍りける人に

おもひいづやのきのしのぶに霜さえて松の葉わけの月を見し夜は（家集33）

がある。冬の夜、荒れた家の簀子に腰かけて、木高い松の枝からもれてくる月かげをうけながら夜もすがら語りあかした人に贈ったものと思われる。これは兼好にとりかなり感動的な一夜だったのか、徒然草に、

北の屋陰に消え残りたる雪の いたう凍りたるに さし寄せたる車の轆も 霜いたく
きらめきて 有明の月さやかなれども 隈なくはあらぬに 人離れなる御堂の廊に な
みなみにはあらずと見ゆる男 女となげしに尻かけて 物語りするさまこそ 何事にか
あらん尽きすまじけれ かぶし かたちなど いとよしと見えて えもいはぬ匂ひの
さと薫りたるこそ をかしけれ けはひなど はづれはづれ聞えたるも をかし（105
段）

と表裏をなすものではないかと思われる。徒然草では、この男女を第三者として扱っているが、家集では兼好の体験と考えられる。ここでの「語る」は従来の用法と変わらない。

よのなか ありしにもあらず うつりかはりて なれみし人もなくなり行くことを
語るべきともさへまれになるまにいとど昔のしのばるるかな（234）

「語る」が歌に詠みこまれている例はこの1首だけである。世の移り変わりの激しさの中で親しき友がつきつきと死んでいくさびしさを詠んでいる。従って、しんみりと昔を話し合う友を「語るべき友」と表現しているのだから、これも従来のものと違いはない。

ともだちのきて よのありにくき事など語るを聞きて

ならひぞと思ひなしてやなぐさまむわが身ひとつにうき世ならねば（家集258）

この「語る」も（234）と同じである。

兼好家集には以上3例が見出だされる。

6. おわりに

こうして私は徒然草と兼好自撰家集とから「語る」の語を抜き出し、その用法から、二つの意味をさぐってきた。繰り返しいうなれば、その一つは平安時代までにしばしば使われてきたように、興味ある事実を相手に向かって感動をこめて語る時に使用されていることである。もう一つはそうした感動的な意味はほとんどなく、「言ふ」よりもさらに厳しい、相手に不快な感情を起こさせるような時にも「語る」が使われていることがわかる。兼好より僅かばかり先輩にあたる鴨長明の方丈記には、日野山の奥に彼が庵を結んだ、その庵の有様の叙述に、ただ1個所だけ「語る」が使われている。「夏は郭公を聞く。語らふごとくに死出の山路を契る」とあるのがそれである。ほととぎすの鳴く音が聞こえるということ、自分が死んで死出の山路を越える時、道案内をしてくれるよう約束するということと

の間にある「語らふ」はいかにも物語的であって、従来の使い方と大きい隔りはない。又、さらに少しさかのぼるのが、道元の正法眼蔵（兼好が臨済禅に近づいたことは事実であり、とくに92段の「道を学する人」の箇所は正法眼蔵随聞記のそれと極めて近いといわれる）における「語る」を抜き出しても、昔の故事を述べたあとに「と語る」とあって、まずは平安時代のそれと大きい違いはない。（なお正法眼蔵での「語る」は「正法眼蔵の国語学的研究」を書いた田島氏によればすべてで8例あるということである。）

こうしてみると、兼好の使い方には二つの用法があることになる。その頃すでに「語る」が本来もっていた独自性を失っていたのかもしれない。現代語にも「彼は私の名を語って悪事を働いたらしい。」という「語る」へ展開していったのだろうか。

思うに鎌倉時代はまさに武士の世界であった。武士の世界ではあったけれども、それは政治上のことであって言語上のことではなかった。言語の世界では諸家が説くように平安時代の公家勢力が残存していたに違いない。南北朝、室町時代は武士相互の争いがあり、社会的不安があり、当代を支える勢力ともいべき公家達の言語生活が大きく崩れていった。平安時代の美しい表現も、鎌倉時代の力強い表現も影を薄くしていった。言語は単純化の方向をたどる。そういう時代に生きたのが兼好である。それは徒然草の研究史からもよくわかる。能勢朝次氏は「徒然草の中で、兼好が最も力をこめて説いているのは道念である。彼が仏道を修し、生涯の一大事たる死生の問題に関して心用意を整へるべき事を説く条々に於ては、その筆端に非常な迫力が漲って居り、その言説はひた押しに押し進められて居て決して両端を挙げ示して中庸を取らしめるやうな叙述態度を採っては居ないのである。謂はば、あくまでも説伏せずんば止まずといった風な気魄が、我々に力強くせまってくるのを感じず。」とあり、その後も多くの人々によって「熱烈な求道者」とも「一徹な求道者」とも捉えられてきた。それなるが故に高等学校の古典教材のトップ的存在をほしいままにしてきたのである。そのこと自体は今もって正しい把握であったことは認めよう。しかし、兼好の内面をほりさげていくにつれ、更につけ加えねばならないことが数多く出てきたことも事実である。すなわち、兼好自撰家集の検討が進むにつれて、徒然草の著者としての兼好と、自撰家集を残した歌人としての兼好と、この二つの作品から考えられる人間像の相違、これが同一人物かと疑問をさしはさむ意見が多く出されるに至った。自撰家集は若き日の兼好であり、徒然草は老いて後のものであれば、これも納得がいく。だが両者いずれも60才代の編であることが定説となった今日、この違いは諸家も厳しく問うところであり、私も拙著「凡庸」において述べてきた。それは出家という事実のみに限ってもわかることである。西行の場合は台記にもあるように、出家を「人これを嘆美す」とあるが、兼好にはそうしたものはない。むしろ、修学院から横川に移る頃から、二条派歌人と交わり、足利家と、高師直と関係を結ぶに至るこの一連の彼の行動は還俗をさえ思わ

せるものがある。一つの事に徹しえない兼好にとり、徹しえないからこそ「この世」があるのであり、それでこそ「生きる」意味があると考えていたのであろうか。自撰家集はそれを物語るに十分な歌である。だが、徒然草は明快である。家集のような気配は全くといってよいほど見当らない。おそらく、このような立場に追いこんだのも時代のもつ矛盾性、自嘲性、自虐性というものではなかったろうか。自らを嘲り、自らを虐げるうちに、烈火の如く感情が激しく揺れる時、厳しい道念のほとぼしりが徒然草であったのではないか。しかしそれは行動的でもなければ実践的でもなかった。あくまで観念の世界における主張ではなかったろうか。こうした二元的人生観が兼好の生きた時代の大きい流れではなかったろうかと思わざるをえない。この二元性が「語る」にもあらわされていると思うのである。

What can be Deduced from the Usage of a Verb “KATARU” Used in Tsurezure-gusa

Tadanao MURAI

*Faculty of Liberal Arts and Science,
Okayama University of Science,
Ridai-cho 1-1 Okayama 700, JAPAN*

(Received September 30, 1986)

The writer has once dealt with Kenko's view of human beings in a treatise of his. By quoting from Tsurezure-gusa he has demonstrated the fact that Kenko, who was uncommonly intelligent, didn't live an active and ordinary life—didn't throw himself in the actual life but lived rather secluded from the world.

Now the writer is going to present some more data in order to support his point in the former treatise. Taking up a particular verb “KATARU” so frequently used in Tsurezure-gusa and then drawing an inference from its usage examples found in earlier literary works such as Kojiki, Manyoshu, etc. and Tsurezure-gusa, the writer tries to comprehend Kenko's way of looking at things and finally make his personality clear.